

笹川記念保健協力財団 奨学金支援

助成番号：2016-

(西暦)

2017年3月17日

公益財団法人 笹川記念保健協力財団

理事長 喜 多 悦 子 殿

2016年度奨学金支援

完 了 報 告 書

標記について、下記の通り完了報告書を添付し提出いたします。

記

所属機関・職名 名古屋市立大学大学院医学研究科 精神腫瘍学分野 博士課程

氏名 津村 明美

笹川記念保健協力財団 2016 年度 奨学金支援（継続）

完了報告書

名古屋市立大学大学院医学研究科 生体情報・機能制御医学専攻
精神腫瘍学分野 博士課程 2 年
津村 明美

名古屋市立大学大学院の精神腫瘍学分野の博士課程の 2 年次での学びは、博士論文の研究を通してのものが大部分を占める。以下に、現在取り組んでいる研究について報告する。

「小児がん患者・家族に対する新たなサポートシステムおよびケア方法の開発研究」

1. 研究目的

がん治療の進歩により、小児がん患者の 70%は治癒が見込めるまでに至っている。こどもががんに罹患すると、患者のみならず、その家族の成員全員が危機的状態に陥る。小児がん患者の親が経験するストレスは、患者のニーズへの対応、変化する家族生活への対処、経済的問題、精神的苦痛など、多岐にわたる。なかでも母親の精神的苦痛は、最も頻度が高く深刻である。小児がん患者の家族の良好な適応は、患者の QOL にも影響するため、より早期から家族への適切な支援が求められている。欧米では、小児がん患者の診断後早期から支援を必要とする対象を、スクリーニングツールを用いて早期発見し、構造化された心理社会的介入を提供することで、精神的苦痛の軽減、心理社会的問題による家族の社会的不適応状態の改善、QOL 向上などにおいて効果をあげている。しかしながら、わが国における小児がん患者の主介護者の精神的苦痛の実態は明らかになっておらず、心理社会的支援を必要とする対象の把握、効果的なサポートやケアの開発を行う上での知見は極めて限られている。

そこで本研究では、小児がん患者の主介護者である母親における、抑うつや不安などの精神的苦痛の頻度および、これらの関連/予測要因を明らかにする。これらをもとに、小児がん患者・家族に対する介入プログラムの枠組みの考案とともに、心理社会的問題のスクリーニングツールの開発を行う。

2. 研究方法

1) 研究 1：診断早期の小児がん患者の主介護者の精神心理的苦痛の実態と関連要因探索

診断早期の小児がん患者の主介護者である母親 300 名を対象に、自記式質問票を用いて 3 時点（診断後 1 ヶ月以内・6 ヶ月後・1 年後）で評価する前向きコホート研究を行う。

抑うつ（Patient Health Questionnaire 9：PHQ9）をアウトカムとして、その発生率を明らかにする。次いで、先行研究から予測される、心理的外傷、ソーシャルサポート、問題解決能力、家族機能、患者の QOL 等と抑うつとの間にある関連を分析し、その結果から介

入プログラムの枠組みを考案する。

2) 研究 2 : Psychosocial Assessment Tool (PAT) 日本語版の開発

米国で小児がんの診断後早期から心理社会的リスクを抱える患者・家族をスクリーニングするために開発された Psychosocial Assessment Tool (PAT) 日本語版の信頼性・妥当性を検討する。定められた翻訳ガイドラインに則り作成された日本語版を、研究 1 と同様の対象者 80 名に計量心理学的検討のための PAT 日本語版を含めた自記式質問紙調査を行う。

3. 結果および進捗状況

1) 研究 1

先行研究のレビューを行い、質問票の作成を完成し、研究デザインを決定した。同時に、多施設協同調査のためのフィールドの確保、各施設における IRB 審査などの準備を行ってきた。質問紙調査の対象者は研究 2 と一部重複するため、研究 1 に先立って、研究 2 の PAT 日本語版の作成からとりかかった。現在は、研究 2 と合わせて、各施設でのデータ収集を行っている。

2) 研究 2

最初に PAT の開発者より日本語版の作成の承諾を得た。原版の開発者より提示された Translation Guideline に則り、日本語版の翻訳プロセスをすすめ、日本語版原版を作成するとともに表面妥当性の検討を行った。2 名のバイリンガルが独立して日本語に翻訳したものを、小児がん患者・家族にかかわる専門職者である別のバイリンガルと研究者が統合し、さらに異なる 1 名のバイリンガルにより英語に逆翻訳し、PAT 原版開発者のレビューを受けた。そこで指摘された点に関して、精神腫瘍医・緩和ケア医・小児科医・心理士・がん看護専門看護師・小児科エキスパートナース・チャイルドライフスペシャリストにフォーカス・グループ・インタビューなどで検討した。そのうえで、プレテストとして、7 組の小児がん患者の家族に対してフォーカス・グループ・インタビューと個別面談を行い、PAT 日本語版原版に修正を加えた。最終的に原版の開発者から PAT 日本語版の承認を得られた。現在は、計量心理学的に信頼性・妥当性を検討するための調査を行っており、データ収集を終えようとしているところである。今後、分析および論文執筆にとりかかっていく。

今後は、質問紙調査を継続していき、得られでデータの分析をすすめていくと同時に、PAT 日本語版を実際の臨床事例で活用し、臨床応用の可能性を検討していきたいと考えている。多施設共同研究によって、さまざまな臨床の方々からのご協力をいただいている。その方々との意見交換や得られた示唆を含め、今後の小児がん患者とその家族へのケアのエビデンスをつくることや、将来の小児緩和ケアのシステムの構築につながる活動につなげていけるように努めていきたい。

最後になりますが、これまでの大学院生活におきまして、奨学金支援をいただきましたこと、心よりお礼申し上げます。